

松田道雄 著

母親のための人生論



岩波新書

C 140



松田道雄著

母親のための人生論

517

松田道雄

1908年茨城県に生まれる

1932年京都大学医学部卒業

現在一評論

著書—「私は赤ちゃん」「私は二歳」

「おやじ対こども」

「私の読んだ本」

「自由を子どもに」

「花洛」「女と自由と愛」

(以上7点岩波新書)

「育児の百科」

「京の町かどから」

「日本知識人の思想」

「革命と市民的自由」

「君たちの天分を生かそう」

「恋愛なんかやめておけ」

「人間の威厳について」

「在野の思想家たち」

母親のための人生論

岩波新書(青版) 517

1964年3月21日 第1刷発行 ©

1979年4月20日 第18刷発行

¥ 320

著 者 まつ だ みち お
松 田 道 雄

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・永井製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします



目次

い

立ち話	2
女性と学問	4
ママ同伴	6
母親のライフ・ワーク	8
恋愛結婚と見合結婚	10
ボクシングについて	12
慈善の周辺	14
三十五歳の問題	16
家庭婦人失業論	18
共ばたらき	20





『母も伸び行く』	22
火事場の野次馬	24
教育と冷酷	26
家庭教育の限界	28
晩年をたのしく(一)	30
晩年をたのしく(二)	32
京都の人	34
中学生のハガキ	38
お父さんと子ども	40
おけいこごと	42
子どもの山岳部志望	44
「現代っ子」というレッテル	46
宴会は野蠻の風習	48

③





は

時間厳守	酒のみ講習会
パパの日曜サービス	育児日記
	お母さんのオシャレ
	亭主関白
	『ベルツの日記』
	女性の節度
	母性愛(一)
	母性愛(二)
	グチの効用
	デラックス修学旅行
	京ことば
76 74	70 68 66 64 62 60 58 56 54 52 50





お惣菜	78
『目の見えぬ子ら』	80
よめ、しゅうとめ (一)	82
よめ、しゅうとめ (二)	84
よめ、しゅうとめ (三)	86
理想論の立場	88
分業のすすめ	90
しゅうとめさんの私有財産	92
中学へいく子	94
テレくさいということ	96
おとなりの子ども	98
子ども中心主義	100
保母さんとお母さん	102
亭主のおつきあい (一)	104
亭主のおつきあい (二)	106
子どものプライバシー	108





お手々つないで	118
奥さんの寝不足	120
定年制について	122
ささやかな幸福	124
いいお母さんの条件	126
家風というもの	128
勲章リバイバル	130
もったいないという考え	132
明治の人	134
禁欲の精神を	136

⑤に

シスター・パパ	110
産休のこと	112
京都のお菓子	114





ほ

先生にきらわれる子	158
子どもをもらいたい	160
晩酌と子ども	162
夫婦ゲンカ是非論	164

『五時から七時までのクレオ』	138
夫への不満	140
チャーム・スクール	142
女性の頭	144
PTAは大病	146
就職と進学	148
静かに生きていきたい	150
家庭婦人の運動について	152
京都のたべもの	154



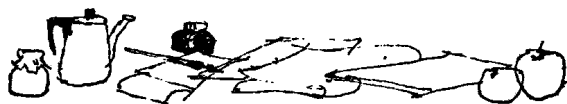


京の着だおれ	赤ん坊か仕事か(三)	赤ん坊か仕事か(二)	赤ん坊か仕事か(一)	これからの平和運動	花嫁修業	「子はかすがい」か	夫婦の思想統一(二)	夫婦の思想統一(一)	保育園と赤ちゃん	古典派に一言	バカンス時代	「よろめき」の予防	「よろめき」	性格の相違
194	192	190	188	186	184	182	180	178	176	174	172	170	168	166





テレビは必要か	198
物騒な世の中	200
団地の近所づきあい	202
往復二〇円片道五円	204
話しあいということ	206
センチメンタルということ	208
先生へのプレゼント	210
悪書追放	212
女性専用車	214
子どもの就職	216
女らしさということ(一)	218
女らしさということ(二)	220
女性の仕事をもつべきか(一)	222





女性は仕事をもつべきか(二)
 七五三
 226 224

と

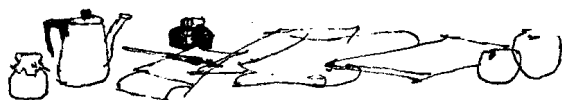
バイ菌ノイローゼ 230
 修学旅行 232
 青年と理想 234
 細君の虚栄心 236
 トルストイ忌 238
 誠実ということ 240
 一万円の入場券 242
 年をとってからの不自由 244
 三十の関所 246
 『ワーニャ伯父さん』 248
 私のみた東京 250





中学生とアイバンク	252
「小さな親切」	254
受験生の親	256
十二月八日	258
いい奥さんの条件	260
レジャーへの恐怖	262
読書のすすめ	264
フェミニスト	266
忘年会	268
子どもとクリスマス	270
クリスマスとおとな	272
あとがき	275

カット・岩崎ちひろ





立ち話



ある女性たちの集まりにいったところ、立ち話というものをどう考えますかという質問をうけました。その女性たちというのは、聡明で、むだなことをするのがきらいで、世の中をもっと合理的なものにしたいという、りっぱな考えをもった人たちでした。

きっと立ち話なんてものは、時間つぶしで、おろかな、ふるい習慣だといってほしかったのでしょう。たしかに、道のまんなかで、買物カゴをさげた女性同士が、二十分も三十分もしゃべっているという風景がよくみられます。

それは、合理派の女性からみると、いかにも不経済で、聡明でないもののようにみえます。けれどもよくみると、立ち話をしている人というのは、いつも顔ぶれがきまっているようです。そのうえ、何だかたのしそうです。話し手になる人、聞き手になる人、どちらも、立ち話をたのしんでいるようです。立ち話の内容は、ときには愚痴であったり、ときには人物批評であったりするのでしょうか。

だが、そういう会話は女性だけがしているのでしょうか。男性だってやっていると思うのです。ただし男性のほうは、もうすこし不経済です。

だいたい女性のほうが舌のまわりがよろしい。これは女性のほうが筋肉組織がやわらかく、運動に持続性があるからでしょう。男性の舌をそういう状態にしようと思うと、これはなにか油をささねばなりません。それがアルコールです。酒をのんでおしゃべりになって、立ち話をするところが、飲み屋とかバーとかいわれる場所です。そういうところで酒をのむのは、女性の立ち話よりもはるかに不経済です。これが日本の男女平等と称するものの、真の姿だと思ひますが、話の内容は、まったく男女平等です。

愚痴であり、人物批評であるところは、女性の立ち話も、男のバーのなかでの話も、まったく同じです。そして立ち話をしている顔ぶれがきまっているように、バーへ行ってだべっている連中も顔ぶれがきまっています。

男性にも合理派があつて、バーへ行ってだべったりしないという人もあります。だが、自分がバーへいかないからといって、バーへ行ってだべる人間を、おろかであるときめつけてしまふわけにはいかないでしょう。

合理派が、そういうバーの常連にとつつかまるのは、たしかに災難です。だが、その常連が常連でだべるのは、それだけの理由があるのです。現在の世の中を、聡明に合理的にやっこうと思つても、うまくいかない。その不満をなぐさめあつていくということです。

だから、立ち話やバーの常連の一見むだな話をやめさせようとすれば、聡明で合理的な人が、そういう不満のある人をバカにしないで、非合理の存在価値をみとめることです。

女性と学問



時どきですけれども、以前みていた患者のお母さんから相談をうけることがあります。女の子なんですが、いま高校へいって大へんよくできる。高校の先生から一流の大学にはいれると折紙をつけられている。

「いったい、大学に入れて勉強させたものだろうか、どうでしょう」
とお母さんがたずねます。もちろん、その子も大学へいきたいと思っている。うまくいけば一生学問をしたいと思っている。

女が学者になって生活していけるかどうかという問題です。そういうとき、私は、大学へいくことはいいと思いますが、学者になるというコースはすすめません。

これは、女性には、学者になるような能力がないかと思っっているのではないんです。能力という点では、男も女も、そうはちがわないと、私は素朴に信じています。

実際に、女性の学者がたいへん少ないのは、個人の能力が足りないからでなくて、女性と男性とで、まわりの条件がひどくちがうからだと思っています。

学者として立っていかうとするのには、いろんな条件がいります。